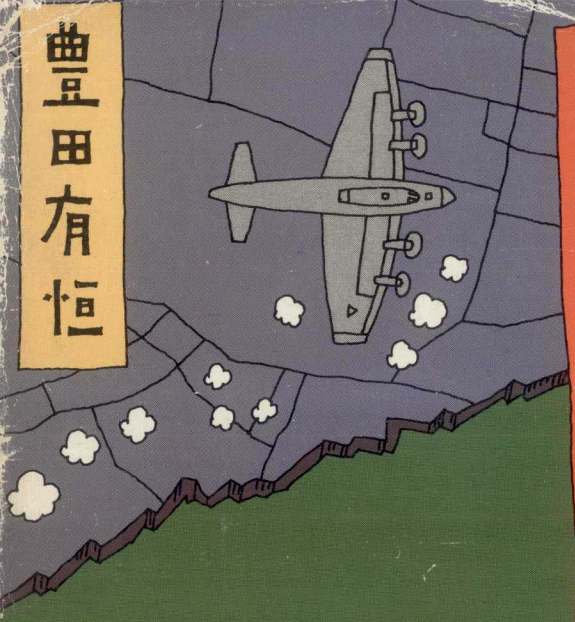
タイムスリップ大戦争



豊田有恒

タイムスリップ大戦争

豊田有恒

角川書店

タイムスリップ大戦争

昭和五十年十月三十日　初版発行
昭和五十一年十月十日　七版発行

著作者　豊田有恒
発行者　角川春樹
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京　三一九五〇八
電話東京（二六五）七二一（大代表）
印刷所　信教印刷株式会社
製本所　株式会社　宮田製本所

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872151-0946(0)

タイムスリップ大戦争

裝幀　和田　誠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プロローグ

一九××年、五月二五日、日本全土を、震度2の軽震がおそった。ここ数年というもの、桜島の噴火、信州の頻発地震、南伊豆地震などが起こり、不吉な前兆とみる人もすくなくなかった。しかし、わずか震度2という軽震に、重大な意味が隠されているなどと考える者は、おそらく一人もいなかったであろう。

しかも、地震が起こったのは、午前二時——ふつうの人間なら、とっくにベッドへもぐりこんでいるはずの時間だった。

この地震は、日本全国のすべての地震計に、震度2を記録させた。初期微動も、揺りかえしもなかった。地震計に記録された波形は、サイン・カーブのような異常なものだった。すぐさま、各地の地震観測所で、震源地の測定がいそがれたが、もともと、この地震には、震源地というものがなかった。

第一章

1　米軍に非常呼集がかかった

地震が起こったとき、おれは、ガールフレンドの美香子と待ちあわせて、赤坂の終夜レストラン〈カオス〉にいた。おれのほうは、ルポライターとしての仕事を片づけ、やっと遅すぎる夕食にありついたばかりだった。

地震があった一瞬のあいだだけ、店内のかしましい会話の流れが中断した。ここに集まっている深夜族たちは、しばらく不安そうに、あたりを見まわした。しかし、それきり揺りかえしがないと判ると、ふたたび会話にとりかかり、なにごともなかったかのような、この店特有の雰囲気がもどってきた。

美香子が姿を現わしたのは、地震の直後だった。1Fの入口に通じる階段のところで、『エレガンス』のページから抜けでたような、ロングスカートをひらめかせて、ひとわたり店内を見おろしてから、おれの姿をみとめて、駈けおりてきた。

「地震あったでしょ。リハーサル、遅くなっちゃったの、ごめんなさい」
美香子は、同時に、ふたつのことを言った。地震があったことと、遅刻の理由とが、まるで関係あるみたいだった。太平楽な性格だから、ときどき言うことが支離滅裂なことがある。
「ああ、地震のことか、たいしたことはない。どうせ、震源地は、海ん中だろう」
おれは、ぶっきらぼうに答えた。
おれは、木谷準二、ルポライターだ。当年とって二八歳になる。この美香子とは、おたがいに拘束しないという約束で、もう一年ちかく、ついたりはなれたりしている。
美香子とは、一年ちょっとまえ、新宿のスナックで知りあった。そのころ、劇団の養成所をでたばかりという、タレントの卵だった。そいつを、知りあいのディレクターに売りこんでやったのがおれで、そんなことがきっかけでそういう関係になったのだが、ここ半年ばかりというもの、おたがい、すれちがいばかりしてきた。彼女のでたCF（コマーシャル・フィルム）がバカ当たりしてしまい、とうとう、ブラウン管の妖精にまつりあげられてしまったからだ。
おれたち二人にとっては、それが、かえってよかったらしい。おれのようなあきっぽい人間が、一人の女と一年ちかくもつづいたのは、すれちがいが多いため、最初の新鮮さがなくならなかったからにちがいない。
そればかりでなく、どうやら、おれたちは、相性がいいらしい。美香子のほうも、おれといるときは、作られた虚像の殻（から）を脱ぎすてることができる。おれのほうも、この生来の楽天家といっしょにいると、仕事で荒（すさ）みきった気分が安まるような気がする。これが家庭の味というものだろうかと、ふっ

と、おれらしくもなく、里心がついたりすることもある。
おれの肩にしなだれかかった美香子の体から、レブリケの香水のにおいが立ちのぼった。おれは、美香子の肩を抱きよせたまま、しばらく黙っていた。
とつぜん、美香子は、おれの肩からはなれ、ハンドバッグから、小さなＩＣ（アイシー）ラジオをとりだした。
「そうだわ、ＦＥＮで、サイモン＆ガーファンクルの特集をやってるはずだわ」
美香子は、そう言って、チューニングをはじめた。ポピュラー・ミュージックとゴーゴーが大好きなのだ。
〈こちら極東放送網（ファーイースト・ネットワーク）。ラジオ、テレビ放送をお送りします〉
ラジオから、あたりかまわぬボリュームで、お馴染の早口の英語がとびだした。うしろのボックスにいた外人バイヤーが、迷惑そうに振りむいたが、美香子は知らん顔を決めこんでいる。
〈番組（プログラム）を変更して、臨時ニュースをお知らせします。こちらは、在日米軍司令部。非常事態（イマージェンシイ）が発生しました。府中の第五空軍司令部の関係者、立川の第三一五空輸師団、横田の第四一航空師団、三沢の第三九航空師団の関係者は、ただちに非常勤務についてください。繰り返します。こちら、在日米軍司令……〉
ＦＥＮのニューズ・キャスターは、興奮した声で喋りつづけた。
おれは、思わずシートから、はんぶん腰をうかした。テーブルを膝でけとばして、ビールをひっくりかえしてしまったが、そんなことにかまっていられなかった。
美香子は、びっくりして、大きな瞳を見開いた。期待していたサイモン＆ガーファンクルが聴けな

くなったので、がっかりしているのだろう。
「いったい、どうしたの？　きゅうに立つから、ビール、こぼれちゃったわよ」
「今のニュースを聞いたか？」
「聞いたわよ。サイモン&ガーファンクル特集がなくなったんでしょ」
美香子は、まだ、ごひいきの音楽番組がなくなったことに、こだわっているらしい。
「そのことじゃない。アメリカ第五空軍に、非常呼集（イマージェンシイ・コール）がでたんだ。たいへんなことが起こりかけてる証拠だ」
おれの声は、うわずっていたかもしれない。なにか、ルポライターとしての第六感にピンとくるものがあった。
第五空軍は、ハワイ＝オアフ島のヒッカム基地のPACAF（太平洋空軍）の直轄下にある。いってみれば、アメリカ航空戦力の日本総代理店みたいなものだ。第五空軍の全師団に非常呼集がでたということは、なにか、とんでもないことが、もちあがったとしか解釈できない。
「どうしたの、準ちゃん、顔色がわるいわ。帰って寝たほうがいいわ」
美香子は、ケロリとした顔で、言ってのけた。このときばかりは、美香子の楽天家ぶりが、腹立たしく思えた。
おれは、ああでもない、こうでもないと、およそ起こりうる可能性のあることを、それこそ脳みそがちぎれるくらい、考えてみた。
シナイ半島に何か起こったのだろうか？　そう考えられる根拠もないことはなかった。もしかする

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、イスラエル軍の前進が開始され、アメリカ軍が介入（コミットメント）を決意したのかもしれない。

あるいは、朝鮮半島に、なにか起こったのかもしれない。最近、北朝鮮の巡察艇を、韓国が撃沈するという事件が起こっている。軍事境界線の緊張は、まえにもまして高まっている。片や武力統一を国是としてきた国であり、片や反政府運動を圧殺する独裁政権をいただく国である。この分断国家のあいだに、なにか起こっても、いっこうにふしぎでない現状である。

ＦＥＮ放送は、なおも訴えつづけていた。三沢、横田など各基地のＦ105戦闘爆撃機に、スクランブル態勢をとらせ、折から横須賀に寄港していた原潜ダニエルブーンおよび原子力空母ミッドウェイに、緊急配置を命じていた。

これは、なみたいていのことではない。容易ならざる事態が起こったとしか考えられない。

いま、アメリカの政情を考えあわせてみると、なんとなく不気味な予感がただよってくる。七〇年代に、タカ派の領袖ニコルスン大統領が退陣し、その後継政権が可もなく不可もない政治をつづけたのち、一九××年とつぜん、超タカ派と目されるウェールス大統領が就任した。ウェールス大統領は、黒人分離の政策をとなえ、南部の州知事として、連邦政府を相手どって、あくまで反対しぬいた経歴を持っている。

ウェールス大統領のもとで、アメリカ合衆国は、急速にファッショ化の道をたどっていた。もともと人種主義者（レイシスト）として名高い大統領は、東アジアの国々に対して、核兵器を使用することも辞さないという、強硬対策をとりつづけてきた。

石油問題に関しても、もっぱら強硬論に終始し、盟邦たる日本政府を悩ませてきたが、日本におい

て、慶良間諸島の南方の――いわゆる尖閣列島油田の開発が行なわれ、この国の石油需給の見通しが好転してからは、どうにか無理難題をひっこめた形になっている。

ウェールス大統領に指導されるアメリカ政府の圧力によって、日本政府も、七×年まで自衛隊という名称で呼ばれていた軍隊を、国防軍に格上げして、増強につとめなければならなくなった。

おれは、あまり驚いたので、膝がガクガクいいはじめた。いったい、なにが起こるか、まったく予想がつかない。在日米軍五万の大兵力が、臨戦体制を命じられている。しかも、なんのためか、つかめないのだ。

「とにかく、アパートへ帰ることにしよう。美香子は、どうする？」

「もちろん、いっしょに行くわ。ここのところ、すっかり忙しくて、ご無沙汰だったから……」

美香子は、ある期待をこめて言った。そういえば、すれちがいつづきで、ここしばらくというもの、まったく美香子を抱く機会がなかった。

おれは、美香子の肩を抱きよせながら、〈カオス〉を出た。

赤坂一ッ木通りにでると、すぐまえに、おれの愛車があった。フェアレディZ―2 by 2。L20型エンジンにスーパーチャージャーをつけ、一六〇PS、二三キログラムまで、チューンアップしてある。

おれと美香子が乗りこんだとき、すでに三時をまわっているため、さすが夜おそい赤坂でも、開いている店は見当たらなかった。

原宿のアパートへ戻るなり、おれは、美香子をベッドに突きたおした。彼女のほうも、押したおさ

れたまま、ハイヒールの靴を蹴りとばして脱いだ。
買ったばかりのシーリーのベッドには、もう男くささが滲みついていた。美香子の体から、オーガンジーのシースルーのブラウスをはぎとると、ピロケースに滲みついた、おれ自身の臭いが、レプリケの香りで中和されて、嘘のようにぬぐいさられた。
おれは、恐ろしかった。体じゅうの神経が、針のようにとがって、耐えきれないような緊張をつくりだした。
おれは、恐怖をまぎらわすため、上気した肌を、花梨みたいな美香子の胸にすりあわせ、性急にことをはこんだ。その行為に没入することによって、さっき知りかけた恐るべき事態を、忘れたいと思ったからだ。
萎えはてて、いったん体をはなしたとき、ようやく、おれの心は落ち着きをとりもどした。
あの非常事態という言葉が、いったい何を指すのか、あいかわらず朦朧としたままだった。ただ、おれの頭に浮かんでくるのは、映画や小説にでてくる最終戦争のことばかりだった。
おれのただならぬ様子は、美香子にも伝わったらしい。
「準ちゃん、今夜はおかしいわ、もう二度と会えないみたい。情熱的なのは、けっこうだけど……」
美香子は、不審そうに訊いてきた。おれは、それには答えず、勝手に喋りだした。
「いいか、核ミサイルが飛んできたら、おれたちは、あっというまに蒸発してしまう。楽しむなら、今のうちだろう」
おれは、テレビでみたウェールス大統領の顔を想いだしながら言った。アングロサクソン特有の酷

薄な顔つきをしている。あの男なら、アメリカの優位を保つため、核ミサイルの一発や二発は、ためらいなく発射するにちがいない。

「いやだわ。こんな恰好で死にたくない」

美香子は、あわてて、肌がけぶとんにもぐりこみ、顔の上半分だけだしたまま言った。あいかわらずの楽天家ぶりが、憎々しく思えるくらいだった。

「美香、おまえには、判ってないんだよ。これは、大変な事態……」

おれが、そこまで言いかけたとき、おれの口唇は、美香子の口でふさがれた。

おれたちが、そんなことをしているうちに、あちこちで、異変が起こっていた。

あとになって判ったことだが、日本だけに異変が起こり……、いや、全世界は元のままなのに、日本だけが……。ともかく、この日を境として、この日本列島——第三紀の造山運動によって作られ、第四紀にアジア大陸から切りはなされた火山性の島嶼は、全世界と隔絶されてしまったのである。

この異変に気づく者は、この列島住民のうちには、ほとんどいなかった。おれのような特殊な職業の人間で、たまたまＦＥＮの臨時ニュースを聞いた者をのぞいては、国防軍の一部だけが、異変の核心にふれる情報を持っていたにすぎなかった。

2　時代遅れの暗号が届いた

その頃、おれの知らないところで、いろいろな不可解なできごとが、つぎつぎと発生していた。そ

して、こういった事件が起こるたびに、日本は、見えない鎖をたちきられたように、世界の国々から離れていくのだった。

アメリカ大使館では、若い通信士のジョイ・ホプキンスが、途方に暮れていた。この青年は、マサチューセッツ州ウースター出身で、クラーク大学を卒業して、はじめて日本勤務についたばかりだった。

赤坂葵町の白亜のビルのなかで、ホプキンスは、本国から届いたばかりの至急報（ブレテイン）を握りしめたまま、困りはてていた。

その至急報（ブレテイン）には、重要機密（トップ・シークレット）という電文指定がついていた。

ふつうの外交暗号は、機械暗号と文書暗号に分けられる。機械暗号は、コンピューターに記憶させた暗号パターンによって解読される。また、文書暗号は、暗号表（コード・テーブル）を使って解読するのがふつうである。

ホプキンスの手にある電信紙には、三個ずつ組になった二桁（けた）の数字が、ぎっしりつめこまれていた。しかも、それらの数字を、手持ちの暗号表と照合しても、まったく解くことができなかったのである。

ホプキンスは、思いあぐねた末に、叱責されることを覚悟の上で、上司の通信課長マクリーン元大佐に、たった今、電話したばかりだった。

重要機密（トップ・シークレット）と指定してある至急報（ブレテイン）を、自分ひとりの判断で、無視することはできない。もと国防省（ペンタゴン）の暗号担当官だった、マクリーン元大佐なら、きっと解読してくれるだろう。

ホプキンスは、マクリーンが到着するまでの時間が、無限につづくかのように感じていた。

「この役（ユー・グッド・フォー・ナッシング・フェロー）たたずめが！」

マクリーンは、通信室に入ってくるなり、どなりつけた。だが、その柔和とも見える顔に、怒りの表情はなかった。

ホプキンスから電文を受けとると、マクリーンは、さっそく解読にとりかかった。その顔から好々爺然とした表情が消え、半生を諜報活動にささげた、非情な職業人の表情が現われた。

解読は、あらゆる暗号パターンに照合した後、今度は使用頻度の計算にとりかかる。

英語でいちばん多く使われるアルファベットは、Eである。従って、いちばん使用頻度の多い数字が、Eということになる。

だが、この場合には、使用頻度から割りだしていく解読法は、成功しなかった。

「ジョイ、こいつは、厄介なしろものだぞ。こいつは、文書暗号のひとつの手なんだ」

「というと……？」

「いいかね、この三個ずつ組になった数字は、なにかの本の頁と行と列を示している。つまり、コード・ブックに使われた書名が判らんかぎり、絶対に解読はできんのだ」

「その話は、ぼくもきいたことがあります」

「しかしな、こんな暗号が使われたのは、せいぜい大戦中までだった。今では、本国との直通回線もあるし、通信衛星もあるからな」

マクリーンは、感慨深げに言ってから、説明をつづけた。

「当時、ハル国務長官は、それぞれの在外公館に、一冊ずつの本を指定した。グルー駐日大使に与えられたのは、『アンクル・トムズ・キャビン』の初版本だった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com